

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

第8期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る

成果目標の見直しに資する研究

分担研究報告書

精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に資する  
自治体等で使用可能なスティグマ体験の評価方法の検討

研究代表者：○黒田直明（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

研究分担者： 森山葉子（国立保健医療科学院 医療・福祉サービス研究部）

研究分担者： 岡田隆志（福井県立大学 看護福祉学部）

研究協力者：○羽澄恵（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

白田謙太郎（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

片岡真由美（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

神川ちあき（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

山口創生（国立精神・神経医療研究センター地域精神保健・法制度研究部）

三宅美智（国立精神・神経医療研究センター 公共精神健康医療研究部）

※○＝執筆者

#### 研究要旨

本研究では、精神障害をもつ当事者がスティグマに遭遇した経験を測定する尺度 The Short version of the Discrimination and Stigma Scale-12 (DISCUS)の日本語版を作成するとともに、さらに簡便にスティグマ体験を評価できる尺度を作成した。

DISCUS 日本語版の作成にあたっては、まず日本語に翻訳し、次に逆翻訳の結果にもとづいて必要に応じた改訂をした。最後に精神科で治療中の18～65歳の者7名に対するフォーカスグループインタビューを通して翻訳表現のわかりやすさ・うけいれやすさを聴取して改訂し、最終版とした。

新たに開発した尺度については、DISCUSを参照しながら独自に作成し、フォーカスグループインタビューでDISCUSと並行して意見を聴取して改訂し、最終版とした。さらに、精神障害者保健福祉手帳を有する18～65歳に対し、DISCUSと新たに開発した尺度への回答を、オンライン調査会社を介して収集した。

DISCUS 翻訳については、「不公平な」を「不当な」、「扱われた」を「扱いを受けた」等に改訂された。新たに開発した尺度はDISCUSに準じて作成・改訂した。オンライン調査では、353名が解析対象となった。DISCUSの総合スコアと新たに開発した尺度のスコアの平均は、それぞれ $0.84 \pm 0.87$ 点、 $0.64 \pm 0.84$ 点だった。過去12か月間で不当に扱われた経験は、DISCUSの各項目では39.6%～59.1%が「少し」以上あると、新たに開発した尺度では、44.7%が「少し」以上あると、それぞれ選択していた。

本研究ではDISCUS日本語版を作成するとともに、新たな尺度を開発した。今後、これらの尺度が広く活用されることで、自治体等の調査負担の軽減と、当事者の視点に立った政策評価に寄与することが期待される

#### A. 研究の背景と目的

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」（以下、「にも包括」）では、「精神障害の有無にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう、医療、障害福祉・介護、住まい、社会参加（就労など）、地域の助け合い、普及啓発（教育

など）が包括的に確保」することが政策目標である。各自治体は地域の支援者や当事者への意見聴取や質問紙調査等で定期的に現状のモニタリングを行う必要がある。

障害福祉計画や障害者基本計画の策定にあたっては、自治体が住民にアンケート調査を実施することが一般的であるが、自治体が独

自に作成した質問項目が用いられていることが多い。各自治体が妥当性・信頼性が担保された共通の質問項目を使用できるようになれば、より客観的で正確な実態把握が可能となるだけでなく、自治体間の比較や複数の自治体をまとめた都道府県全体の実態把握が可能となる。

「にも包括」の構築においては「差別や偏見のない、あらゆる人が共生できる包摂的な社会」の実現を重要な政策目標と位置付けており、第8期障害福祉計画の国指針においては「心のサポーター養成事業」に関連する成果目標と活動指標が新設された。このような背景から本研究班では精神障害をもつ住民が体験する差別やスティグマについて自治体の実態を継続的に把握できる評価方法を検討することとなった。

今回、日本語版を作成した The Short version of the Discrimination and Stigma Scale-12 (DISCUS)が挙げられる。DISCUSは、精神障害がある当事者が、障害に伴って差別を受けたと感じた経験を測定する自己報告式尺度であり<sup>1</sup>、妥当性・信頼性が確認されている<sup>1,2</sup>。英国の King's College London で開発され、同大学を母体とし精神障害がある当事者へのスティグマ撲滅を目指す INDIGO network によりヨーロッパをはじめ世界各国で翻訳されている<sup>3</sup>。DISCUSのもととなっているインタビュー形式尺度 the Discrimination and Stigma Scale-12 (DISC-12)は<sup>4</sup>、イギリスやニュージーランドにおける政府が関与した大規模アンチスティグマキャンペーン<sup>5,6</sup>でも使用されており、国際標準のアウトカム評価指標である。

そこで、本研究では DISCUS を日本でも使用できるよう翻訳し、集計を行うこととした。また各自治体等での住民調査での利用可能性をより高めるため、DISCUS と DISC-12 をもとにさらに短く簡便な尺度を作成した。

## B.方法

### 1. DISCUS とは

DISCUS は、過去 12 か月の期間で不当な扱いを受けた経験の程度を様々な状況や相手について問う。全 11 項目で構成され、各項目について 5 つの選択肢 (0.全くない・1.少し・2.まあまあ・3.とても・あてはまらない) から最も近いものを選ぶ。なお、不当な扱いを経験した期間については、必要に応じて過去 12 か月の代わりに初めて精神障害を経験して以降、もしくは任意の期間に変更してもよい。

スコアの算出に当たっては、各項目の平均得点を総合スコアとした。“あてはまらない”は欠測として扱った。

### 2. DISCUS 日本語版の翻訳

本研究では、INDIGO network が求める手順 (<https://indigo-group.org/resources/stigma-measures/disc-discus/>, accessed in 2025.7.1) に準拠し、以下の手続きで日本語版の開発および表面的妥当性の検討を行った。

#### ① 翻訳

日本語を第一言語、英語を第二言語とする者(黒田)が原版を翻訳してドラフトの日本語版を作成した後、3名(黒田・三宅・羽澄)で日本語訳の適否について議論し、修正を行った。

#### ② 逆翻訳

まず、英語を第一言語、日本語を第二言語とする者1名が、原版を閲覧せずに日本語版を英語に逆翻訳した。次に、上記3名が原版と逆翻訳版を見比べ、日本語版の必要な個所について議論のうえ改訂を行った。

#### ③ フォーカスグループによる検討

翻訳された日本語版の言い回しがわかりやすいか、受け入れやすいか等を確認するため、18~65歳で精神科に通院中の当事者とフォーカスグループインタビューを開催した。機縁法にて参加同意が得られた7名とファシリテーターとして上記3名の計10名

で、60分のフォーカスグループインタビューを開催した。教示文と各項目について、上記の確認すべき2点を質問したうえで自由に意見を述べる半構造化面接の形式で行った。フォーカスグループで得た意見に基づいて日本語版を再度改訂し、最終版とした。

### 3. 新たな評価尺度の作成

差別を受けた体験について、さらに簡便に回答できるよう、新たな尺度を作成した。DISCUSとDISC-12をもとに過去12か月に差別を受けた経験の程度4件法（全くない・少し・まあまあ・とても・あてはまらない）で問う設問と、「全くない」以外を選択した場合は差別を受けた相手や状況を21項目とその他の状況から複数選択する設問で構成された。差別を受けた相手や状況については、DISCUSのもとになったDISC-12下位尺度を構成する21項目に対応している。DISC-12、DISCUS、新たな評価尺度、それぞれで聴取しているスティグマ体験は表1のとおりである。

DISCUS日本語版翻訳の手順における②が完成した段階で同様の文言で開発したうえで、③のフォーカスグループの際に、新たに開発した評価尺度の文言についても同様に意見を求め、必要箇所の修正を行った。

### 4. 尺度スコアの集計

DISCUSと新たに開発した評価尺度のスコアを把握するため、クロスマーケティング株式会社に委託してオンラインによる横断調査を実施した。選択条件は①18～65歳、②精神保健福祉手帳を所持している、と回答した者とした。一方、「以下の選択肢からDを選んでください。（選択肢A～D）」という設問でDを選んだ者は、適切に回答していないとみなし、解析から除外した。DISCUSの項目すべてで「該当しない」を選択した者も、解析ができないため除外した。

### 5. 倫理面への配慮

DISCUSの翻訳にあたっては、事前に開発者の許諾を得た。

本研究は、国立精神・神経医療研究センター研究倫理委員会の承認を経て実施した（承認番号No. A2025-012）。フォーカスグループについては、事前に口頭及び書面で研究説明を行い、書面で同意を得られた者のみが参加した。また、あくまで参加者自身の経験ではなく当事者の一般論の経験として意見をうかがうことが目的であることを強調し、侵襲性を最小限にするよう努めた。オンライン調査では、事前に書面で研究説明を行ったうえで電磁的同意を取得した。

## C. 結果

### 1. DISCUS日本語版の翻訳について

翻訳の段階では、専門用語に関する議論が中心であった。例えば、「mental health problems」の翻訳は「精神障害」と「メンタルヘルスの問題」のどちらが良いか議論され、本尺度では診断に伴うサービスに関わる項目も多く意図する回答集団の範囲を明確にすることが重要との判断から、「精神障害」を採用した。

逆翻訳の段階では、原版と逆翻訳版で異なる英語表現がいくつか散見されたものの、逆翻訳者に問い合わせたところ全て相互に置換可能な語であったため、最初の日本語版の表現が維持された。

フォーカスグループの段階では、わかりやすさ、受け入れやすさの観点から複数の意見が挙げられた。例として、「不公平」という表現は比較対象が明確にある印象を受け漠然とした体験の場合に回答しにくいとの意見から「不当」に改訂した。また、「扱われた」という表現は「扱いを受けた」のほうが主観的な体験として捉えやすいとの意見を受け、改訂した。さらに、わかりづらい表現や冗長といった意見から「就労」は「仕事」に、「原家族」は「生まれ育った家族」に、「短大・

専門学校、大学、仕事の研修、職業訓練課程」は「学校や職場の研修」に、「病院や地域生活でのプライバシーについて」は「例：プライベートな手紙や電話、医療系記録、犯罪全科歴のチェック」に、「(周囲から)避けたり遠ざけられたり」は「(周囲から)避けられたり距離を置かれたり」に、それぞれ改訂した。

なお、最終版は INDIGO network のホームページ (<https://indigo-group.org/resources/stigma-measures/disc-discus/>) にて登録手続きを行った後、閲覧・使用が可能である。

## 2. 新たな評価尺度の作成について

DISCUS と同様の文言については上記のとおり改訂した。加えて、わかりやすさの観点から「プライバシーの程度」を「プライバシーが守られる程度」に、「保護者」を「養育者」に、それぞれ改訂した。

なお、公共精神健康医療研究部の黒田に個別にメールすることで最終版の閲覧・使用が可能である。

## 3. 尺度スコアの集計

353 名が解析対象となった。年齢は 45.17 ± 10.69 歳で、308 人 (57.6%) が男性だった。手帳の等級は、1 級 17 人 (3.18%)、2 級 290 人 (54.2%)、3 級 (43.4%) だった。DISCUS 総合スコアの平均は、0.84 ± 0.87 点で、各項目では 21.3% ~ 50.0% が「少し」もしくはそれ以上の差別を体験したと回答した。特に割合が多かった項目は、「精神障害があると知っている人たちから」(50.0%)、「仕事を続けるとき」(44.3%)、「身の安全や安心に関すること」(43.9%) だった。新たに開発した評価尺度の平均スコアは 0.64 ± 0.84 で、過去 12 か月間の差別を受けた体験は 41.0% が「少し」もしくはそれ以上と回答した。差別を体験した回答者においては、「住居に関すること」(31.3%)、「精神障害があると知っている人たちから」(28.5%)、

「恋愛関係や親密な関係になるとき」(24.0%) の割合が特に多かった。

## D. 考察

本研究では、精神障害をもつ当事者が経験したスティグマを測定する尺度 DISCUS の翻訳と集計を行うとともに、DISCUS と DISC-12 をもとに簡便かつほかの障害がある当事者でも測定可能な尺度を開発した。両尺度は、地域における障害がある人のスティグマ体験の総合的な程度と場面ごとの頻度を同時に把握でき、障害福祉計画や障害者基本計画等におけるスティグマ低減の取り組みの立案・政策評価・地域の協議会運営に活用できると期待される。スティグマ体験の状況について国際比較を想定する場合は DISCUS を、回答者の負担に配慮した簡便な調査では新たに開発した評価尺度を活用すると良いと考える。

フォーカスグループに参加した当事者は、本質問紙に回答する人が自らの主観的体験にもとづいて安心して率直な回答ができるように表現の修正を求めている。フォーカスグループの意見を反映したことにより、わかりやすさのみならず、回答する当事者にとって心理的負担の少ない表現になっていることと期待する。

集計については、DISCUS 総合得点より新たに開発した尺度のほうが低く、「全くない」の割合も多かった。これは、新たに開発した評価尺度には DISCUS と異なり「該当しない」の選択肢が存在しないことが一因の可能性もある。また、新たに開発した尺度に基づくと、本研究に参加した精神保健福祉手帳保持者のうち 44.7% が過去 12 か月の間にスティグマを体験したと感じており、精神障害を持っていると知っている相手からの差別や仕事の継続や住居関連、身の安全に関して、恋愛や親密な関係の構築の場面で特に体験しやすいことが示唆された。

本研究は小規模のオンライン調査でデータ

を収集したため、結果の代表性に限界がある。オンライン調査の参加者はインターネット環境と居住環境が充実した都市部在住の者に偏りやすいことが指摘されている<sup>7</sup>。よって、日本の現状を表す値として捉えるのは控え、本研究で開発された尺度を用いて実際に各地域の住民を対象とした調査を今後実施していくことが重要といえる。

## 結語

本研究では、当事者の視点から表現のわかりやすさと受け入れやすさを考慮しながら、精神障害をもつ人のスティグマ体験を測定する国際的な評価尺度の日本語版を作成するとともに、同様の情報をさらに少ない質問項目収集できる新たな尺度を作成した。これらの尺度が自治体の障害福祉計画等の運用で活用され、当事者の視点に立った政策評価が実装されることを願っている。

## 文献

1. Bakolis, I. *et al.* Development and validation of the DISCUS scale: A reliable short measure for assessing experienced discrimination in people with mental health problems on a global level. *Schizophr. Res.* **212**, 213–220 (2019).
2. Brohan, E. *et al.* Measuring discrimination experienced by people with a mental illness: replication of the short-form DISCUS in six world regions. *Psychol. Med.* **53**, 3963–3973 (2023).
3. Van Bortel, T. *et al.* Anticipated and experienced stigma and discrimination in the workplace among individuals with major depressive disorder in 35 countries: qualitative framework analysis of a mixed-method cross-sectional study. *BMJ Open* **14**, e077528 (2024).
4. Brohan, E. *et al.* Development and psychometric evaluation of the

Discrimination and Stigma Scale (DISC). *Psychiatry Res.* **208**, 33–40 (2013).

5. Thornicroft, C., Wyllie, A., Thornicroft, G. & Mehta, N. Impact of the “Like Minds, Like Mine” anti-stigma and discrimination campaign in New Zealand on anticipated and experienced discrimination. *Aust. N. Z. J. Psychiatry* **48**, 360–370 (2014).
6. Henderson, C. *et al.* England’s time to change antistigma campaign: one-year outcomes of service user-rated experiences of discrimination. *Psychiatr. Serv.* **63**, 451–457 (2012).
7. 谷口将紀 & 大森翔子. インターネット調査におけるバイアス：国勢調査・面接調査を利用した比較検討. (2022).

## E.健康危険情報

なし

## F.研究発表

### 1.論文発表

1) Megumi Hazumi, Michi Miyake, Sohsei Yamaguchi, Kentaro Usuda, Mayumi Kataoka, Mayui Nara, Ayako Nakashita, Naoaki Kuroda. Validity and Reliability of the Short Version of the Discrimination and Stigma Scale-12 (DISCUS) in Japanese. *in preparation*.

### 2.学会発表

1) 羽澄恵、三宅美智、山口創生、岡田隆志、森山葉子、神川ちあき、臼田謙太郎、片岡真由美、奈良麻結、中下綾子、黒田直明：障がい当事者のスティグマ体験の測定尺度の翻訳と開発. 第84回日本公衆衛生学会, 静岡, 2025.10.29-31.

2) 神川ちあき、片岡真由美、臼田謙太郎、羽澄恵、奈良麻結、山口創生、岡田隆志、森山葉子、黒田直明：障害福祉計画「にも包括」分野における障害福祉サービス利用者へのインタビュー調査. 第84回日本公衆衛生

学会，静岡，2025.10.29-31.

**G. 知的財産権の出願・登録状況**

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし

表 1. 各尺度で聴取している項目

	DISC-12	DISCUS	新たな評価尺度
<b>【場面】</b>			
友人関係を作ったり、続けたりするとき	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
恋愛関係や親密な関係になるとき	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
仕事を見つけるとき	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
仕事を続けるとき	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
公共交通機関を利用するとき	5 件法	-	複数選択の 1 つ
福祉給付金や障害年金を取得するとき	5 件法	-	複数選択の 1 つ
余暇を過ごすとき	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
からだの健康のケアを受けるとき	5 件法	-	複数選択の 1 つ
子供の養育者としての役割をはたすとき	5 件法	-	複数選択の 1 つ
宗教上の活動を行うとき	5 件法	-	複数選択の 1 つ
<b>【事柄】</b>			
住居に関すること	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
教育に関すること	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
結婚や離婚に関して	5 件法	-	複数選択の 1 つ
家族や子供を持つこと	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
身の安全や安心に関すること	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
プライバシーが守られる程度について	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
<b>【相手】</b>			
近所の人たちから	5 件法	-	複数選択の 1 つ
家族から	5 件法	-	複数選択の 1 つ
警察から	5 件法	-	複数選択の 1 つ
障がいの支援に関わる専門のスタッフから	5 件法	-	複数選択の 1 つ
障がいがあると知っている人たちから	5 件法	5 件法	複数選択の 1 つ
総合的な体験	-	-	4 件法

DISC-12, The Discrimination and Stigma Scale-12

DISCUS, The Short version of the Discrimination and Stigma Scale-12